

報道関係者様各位

2018年10月12日
東京大学情報学環長 田中秀幸
制作展担当教授 苗村健



第20回東京大学制作展

開催のお知らせ

今秋、東京大学にてテクノロジー×アートの展覧会「第20回東京大学制作展」を開催いたします。一般の方に、技術に親しんでいただく接点となるべく、毎年開催している本展覧会。東京大学の学生たちが、日々研究で培っている技術を芸術として昇華させた、個性豊かな作品が並びます。

第20回目となります今回のテーマは、"Dest-logy REBUILD"です。今夏の「東京大学制作展Extra2018」では私たちの生活に溶け込んだ「あたりまえ」を壊してみること "Dest-logy"をテーマとしました。それでは「あたりまえ」を壊した先に見えるもう一つの世界線はどうなっているのでしょうか？

「あたりまえ」を壊し、再構成するような作品を様々な形で体験できる展覧会です。

開催の概要

会期：2018年11月15日(木)－19日(月)
会場：東京大学本郷キャンパス 工学部2号館
2階展示室・2階フォーラム・9階92B
開場時間：11時－19時
入場料：無料

最寄駅：千代田線 根津駅 徒歩8分
南北線 東大前駅 徒歩10分
丸の内線 / 大江戸線 本郷三丁目駅 徒歩12分
主催：東京大学大学院 情報学環・学際情報学府
WEB：<http://www.iiiexhibition.com/>
(最新情報はWEBサイトをご参照下さい)

お問い合わせ

制作展広報担当： 秦・大橋
メール：seisakuten@gmail.com



第 20 回 東京大学制作展

本展覧会のテーマ

“Dest-logy REBUILD”

もうひとつの世界線。

いつのまにか、みんながパソコンを使っていた。
いつのまにか、みんながスマホを持っていた。

テクノロジーはわたしたち人類が進む道を、たしかに決定づけてきました。
その分岐点で、もしもわたしたちが別の道を進んでいたら…？

今ある「あたりまえ」を一度壊したら、そこにはもうひとつの世界線がきっとある。なかったはずの世界に、あなたは何を見るでしょうか。

本展では、テクノロジーを用いたアートでもうひとつの世界線を新たに作り出し、提示します。

会場案内

東京大学本郷キャンパス 工学部2号館2階展示室・2階フォーラム・9階92B
※会場についての最新情報はWebサイトを参照ください



作品のご紹介

今回掲載しているのは展示作品のごく一部で、全作品の紹介は公式サイト(<http://www.iiiexhibition.com>)にて行う予定です。いずれも個性あふれる作品となっておりますので、ぜひご覧いただけると幸いです。



「自律する影」

九鬼慧太 神宮亜良太 大伏仙泰

あなたの影があなたの意志とは無関係に動く作品です。普段その存在すら気に留めない自分の影が、自身と同じ動きをすると無自覚に信じている自分の影が、ひとりで動き出したとしたら。気持ち悪いと思うのでしょうか。気がつきすらないのでしょうか。別の生き物のように見えるのでしょうか。あるいは、もうひとりの自分の存在を感じるのでしょうか。

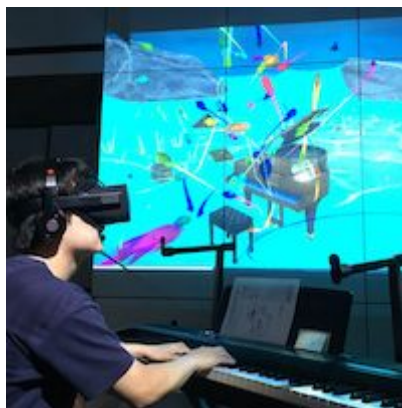


「二重人殻」

畑田裕二

本作品は、自身のドッペルゲンガーとの対峙。来場者の姿を会場でスキャンし、バーチャル空間で「自分」とのインタラクションを通じて自分を見つめ直す体験をします。

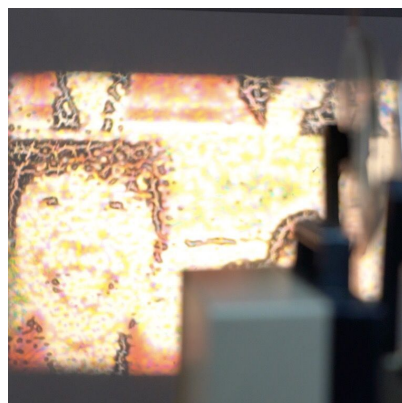
他人事/自分事を隔てるN人称は、あなたに無断であなたの思考に影を落としています。もしも我々のこのどうしようもない一人称をテクノロジーが打ち砕き、自己像を客体化できた時、人類はより自由な眼差しを獲得し得るでしょうか。また、彼岸と此岸の境界が崩されてなお、人類の自己愛は無事でいられるでしょうか。



「VR Piano Visualizer」

たか友康 山口紗穂 橋本憲明 小沢健悟 宇川拓人

普段見ることのない「音」をVRで見て楽しむ作品です。体験者はVRゴーグルを被った状態で電子ピアノを演奏します。すると鍵盤の打鍵情報を元にVR空間内で演奏した音が立体映像化されます。海底のシーンでは、音は魚となりピアノの中から飛び出し、体験者の周囲を自由に泳ぎ回ります。本作品はピアノに初めて触れ音が鳴った時の驚きや興奮を呼び起こすことで、「音を生み出す行為の根源的な楽しさ」の再発見を促します。

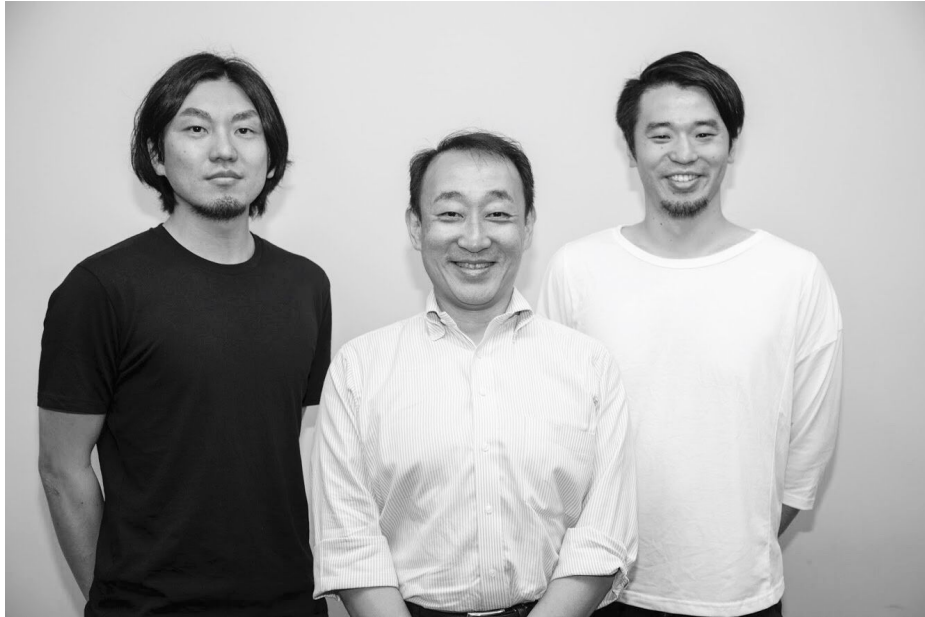


「8mmのおもひで」

よこえれいな 青木大登

来場者のスマホ内の映像をその場でアップロードしてもらい、8mmフィルム状にプリント、上映する参加型の展示。8mmフィルムは主に70年代にホームムービー用に使われたアナログの映像メディア。テクノロジーの進化の中で衰退した8mmフィルムを再現するとき、新旧のメディアとプライベートな映像の文化史が交差する。

講師陣挨拶



小松 宏誠
東京大学大学院情報学環
非常勤講師

苗村 健
東京大学大学院
情報学環/情報理工学系研究科
教授

赤川 智洋
東京大学大学院情報学環
非常勤講師

東京大学大学院情報学環・学際情報学府では、学生たちが自らの研究的な関心をもとに表現活動に挑戦する学際的实践の場として「東京大学制作展」を開催してきました。表現活動と研究活動の両立は、同大学院が 2000 年に設立された当初からの大きなテーマです。この展示を通じて学生たちには、表現活動としては新たなキャンバスそのものを創出し、研究活動としては机上の空論に終わらない社会に開かれた研究スタイルを学んでほしいと考えています。

今年度7月には、テクノロジーがもたらした現代の「あたりまえ」に対して、それを壊すことを通して立ち止まり、考えてみようという想いを込めて、“Dest-logy”というテーマで制作展 Extra を開催しました。そこでの経験やフィードバックを活かし、今回の第20回東京大学制作展のテーマは“Dest-logy REBUILD”に決まりました。Extraでの思索の先にある再建、そして新しい世界線を探る試みです。まだ粗削りではありますが、可能性を秘めた原石たちの取り組みをご覧ください。みなさまのご来場を教職員、学生一同、心よりお待ちしております。

プロデューサー挨拶



プロデューサー 畑田 裕二
 東京大学大学院 学際情報学府
 廣瀬・谷川・鳴海研究室 修士課程1年

プロデューサー 大橋 敢
 東京大学大学院 学際情報学府
 廣瀬・谷川・鳴海研究室 修士課程1年

東京大学制作展は、多種多様なバックグラウンドを持つ学生たちが創り上げるメディアアート展示会です。毎年、7月の前哨戦（Extra）・11月の本展示という構成で行い、学生たちは1年を通じて展示会の企画・制作・運営を行っています。

今年で20回目の開催となる制作展。7月に掲げたテーマは"Dest-logy"でした。テクノロジーが、歴史の作り上げた文化・価値観と平衡を保っている現在に対して、アートを通じてテクノロジーを推し進めることで、「あたりまえ」を壊すような問題提起や再解釈を試みました。

そして7月の制作展Extraを受けてメンバー全員で話し合った結果、11月のテーマは "Dest-logy REBUILD"に決まりました。過去の制作展の多くでは、7月と11月ではテーマの趣が異なります。しかし我々は、7月に語った"Dest-logy"という物語の、その先がどうなるのか気になって仕方がないのです。

文脈の糸に雁字搦めになっていた「あたりまえ」が打ち砕かれた時、カケラ達は自由に踊りだすことなのでしょう。常識のピースの配置が変われば、全く異なるもう一つの世界線がそこに描き出されます。皆さんの「あたりまえ」を壊し、再構成するような作品たちをぜひご覧ください。ご来場をお待ちしています。